

番組：「障害がある人も、ない人も 働く！」を見て

12/3にNHK教育TVのETVワイド「障害がある人も、ない人も 働く！」が放送（約3時間）された。

あいにくビデオデッキが故障で録画出来ず、また、外出で見ることが出来なかった。でも、何とも便利で親切なIT時代。ネットで各放送局の障害関係の番組をダウンロードして見られるHPサイトがある。ようやくこのサイトに「障害がある人も、ない人も 働く！」の番組もアップされたので、見た。

事例紹介のビデオを交えながら、当事者と障害者を雇用する会社・企業の方も参加しての社会に出て働きたいと考える障害者の就労問題について共に語り合う番組であった。

障害者自立支援法成立で応益負担の問題もあるが、社会的、経済的自立への問題もあり、障害者雇用の問題は、こかれから益々社会的（また、マスコミ的）にも取り上げられるべきことだと思っただけに、時を得た放送と感じた。

「障害があっても自分らしく、自立した生活を送りたい・・・」と願い、社会に出て働きたいと考える障害者は増え続けている。

その一方で、「国が定めた法定雇用率(1.8%)が未だ達成されない現実」とか。

また、会社・企業へのアンケートでは、障害者を雇用しても「何をしてもらえばいいかわからない」の回答が50%強とか。

こうした数字に接すると、社会（会社・企業側）はまだまだ障害者の実態を理解していないし、理解しようとしてきたのか？と思ってしまう。

障害は人の一つの属性であり、障害は不便であるから、その不便を周りが工夫、支援する「働く」環境を整えれば、その人の他の属性である才能、能力を発揮出来る方もたくさんいるはず。

番組を見て、障害者の就労の問題は、まだまだ社会的には序に着いたところとの印象を受けた。

一方、重度重複障害者の周辺から、「障害者就労問題は、重度重複障害者には関係ない話……」との、皮肉からか、または、疎外感からか、そういうニュアンスの話をよく耳にする。

「『働く』とは、どういうことか？」は、自分なりの見解をもっている（「雑学BN」の「福祉・教育・医療関係（I）P、2005.3.06.02.：参照）。

根本的な議論を抜きにしては、障害者の中でも、差別、区別、疎外が生じかねないのでないかと危惧を抱く。

(2005年12月16日記)